

【巻頭言】 附属学校教育局 教育長 呑海沙織 「筑波大学の附属学校群として」

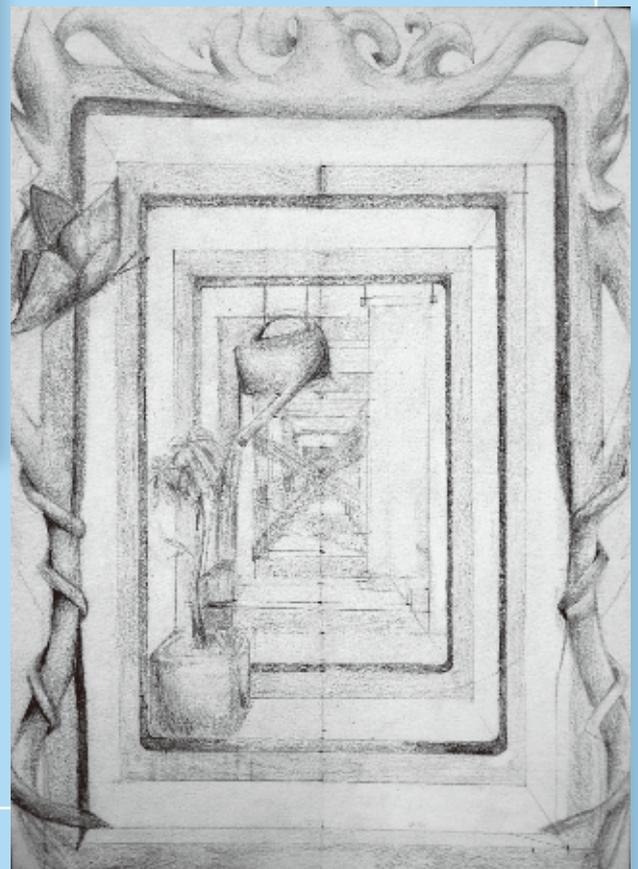
- 2 令和5年度 附属学校教育局主催教員研修会を開催しました——— 雷坂浩之
- 3 令和5年度 理療科教員養成施設 施設学生卒業式——— 徳竹忠司
- 3 令和5年度 学校公開——— 高山真美
- 4 卒業生・修了生に学ぶ——— 鎌田ルリ子
- 4 駒場の探求 -総合学習地域研究- ——— 杉村千亜希
- 5 教師も国際交流——— 志田正訓
- 5 3年生最後の寄宿舎行事 ～笑顔で送る分散会 在校生思い出と共に～ ——— 佐伯 登
- 5 西オーストラリア研修——— 中臺昇一
- 6 春の国際教育プログラム——— 栖原 昂
- 6 ガレージカフェ・プロジェクト2024——— 大宮弘恵
- 7 第52回 肢体不自由教育実践研究協議会をオンラインにて開催——— 田村裕子
- 7 南極派遣のその後 -附属小学校との連携を通して- ——— 小松俊介
- 8 第19回「科学の芽」賞 募集要項



筑波大学
University of Tsukuba



「心の中を描く」【受胎告知】
太田紗倉 附属中学校3年(制作当時)



「不思議な通路」(一点透視図法を用いた表現)
小山七海 附属中学校2年(制作当時)

筑波大学の附属学校群として

附属学校教育局 教育長 呑海沙織



DONKAI
SAORI

附属学校教育局および附属学校群では、2008年より附属学校将来構想検討委員会を中心に、附属学校の将来構想について検討を進めています。昨年度は、附属学校群等の課題として、附属学校群ミッションおよび附属学校群等グランドビジョンの策定を掲げ、それぞれに取り組みました。

まず、附属学校群のミッション策定に向けて、全附属学校教職員を対象としたミッション策定ゼミナールを実施しました。このゼミナールは、2023年10月から12月にかけて計6回、各附属学校およびオンラインにて行い、これまでの将来構想を振り返るとともに、将来の教育像、国立大学附属学校の現状と課題、インクルーシブ教育システム、ウェルビーイング、これからの附属学校群について、共に考えました。さらに、附属学校群ミッション策定ワーキンググループを立ち上げ、主に各附属学校の若手教員によるミッションに関するアイデアを共有しました。

これらの取り組みを通じて、附属学校間の壁を超えた議論が少し進んだように思います。エクスペリメンタルスクールとしての筑波大学附属学校群がこれからどのようにしてどのような社会的役割を果たすのか。そのために何を变え、何を守るのか。絶えず問い続けながら、引き続き将来構想を検討して参ります。



令和5年度 附属学校教育局主催 教員研修会を開催しました

附属学校教育局次長 雷坂浩之

去る令和6年3月16日(土)に、独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターの主任心理療法士である三原聡子先生を講師としてお迎えし、「ネット・ゲーム依存の現状と予防・対応」というテーマで、附属学校教育局の主催による教員研修会を開催しました。

ネットやゲームの過剰使用や依存により、食生活や生活リズムの乱れると、栄養失調や運動不足による骨密度の低下や体力の低下が起きます。昼夜逆転の生活による睡眠障害や、ネット環境がない場合にイライラ感が増大したり無気力になったりすることもあります。更に、ネットでの過剰な課金によってうつ状態などの問題が生じることがあります。ネット・ゲーム依存は、子どもの心身の健康を害するものとして対策が求められている深刻な問題です。

よって、対面・オンライン(当日開催)・オンデマンド(視聴期間は令和6年4月12日～5月10日)のハイブリット型で今回の研修会を企画したところ、教員だけでなく保護者も含めて300名を超える参加の申込みがありました。研修会を通じて、ネット・ゲーム依存の実態や予防・対策に関する最新の情報を得た参加者の大半からは有意義な研修であったとの感想をいただきました。



研修会の案内ポスター

令和5年度 理療科教員 養成施設 施設学生卒業式

理療科教員養成施設 講師 徳竹忠司

大学会館内別室での集合写真



令和6年3月25日(金)大学会館大講堂にて、午前の部の卒業式に出席致しました。令和5年度の卒業生は入学時の人数そのままの15名でありました。本卒業学年は、コロナ禍の終息まであと少しという時期に入学をしたので、前年の卒業生に比べると、ほぼ通常の授業体制で学生生活をおくることができました。本施設は視覚特別支援学校理療科の教員養成を目的としており、入学生も多くは視覚特別支援学校の卒業生であります。本卒業学年は1/3が専門学校卒業生であります晴眼学生でありました。クラスの特徴としましては「元気」というフレーズがぴったりのクラスでした。卒業研究においては、各自の関心がある領域をテーマとして実験研究2グループ、調査研究2グループの4つのグループで活動を行い、2月には最終発表会を行いました。大講堂での式典終了後に大学会館内の別室にて、和田施設長より卒業証書と教員免許状(特別支援学校 自立教科教諭1種 免許状(理療))が授与されました。新年度開始が間近と言うことがあり、すでに勤務地へ移動していた学生は残念ながら式典には出席できませんでした。最も遠方への就職は

沖縄県であります。新任教員としての活躍を楽しみにしています。



総代：施設長より改めて
証書を授与される

令和5年度 学校公開

附属久里浜特別支援学校 教諭 高山真美

授業見学ツアー



令和5年11月3日(土)に、4年ぶりとなる学校公開を行いました。隣接する国立特別支援教育総合研究所

の公開と同日に行い、どちらの施設にも行き来できるようにし、大勢の方が来校してくださいました。午前の部では、授業参観と合わせて一般の方に向けた公開授業を行い、午後の部では、近隣の作業所による販売会と卒業生が集う会を開催しました。

公開授業は、参加者をいくつかのグループに分け、多くの授業を参観できるように案内するツアー形式で行いました。各学級の参観時間は短くなってしまいましたが、実態に応じた授業の特色や子どもたちの様々な様子を見ていただきました。参加者からは、「もっと学校や子どもたちのことを、深く知ってみたいくなった。」というような感想を多くいただきました。

午後の販売会では、卒業生が営むうどんカフェや卒業生が就労している作業所などに声を掛け出店に協力してもらいました。販売会のチラシを見て、買物を楽しみにする児童がいました。また、保護者や職員にとっても、近隣の作業所のことを知る良い機会になりました。

卒業生が集う会では、久しぶりの母校の教室を当時と変化がないか隅から隅まで確認している卒業生もいました。簡単なゲームや自己紹介で盛り上がり、久しぶりに会う恩師と久里浜での思い出や現在の生活のことなど、尽きない話に花を咲かせたりと、にぎやかなひと時となりました。

近隣の作業所による販売会



卒業生が集う会





卒業生・修了生に学ぶ

附属聴覚特別支援学校 主幹教諭 鎌田ルリ子

令和5年度卒業式



令和6年3月、幼稚部7名、小学部10名、中学部14名、高等部普通科24名、専攻科7名の62名が卒業・修了を迎えました。卒業式の式辞では、宮澤章二氏の詩「行為の意味」

を抜粋要約した次の一節が紹介されました。

「こころ」はだれにも見えないけれど
「こころづかい」は見える
「思い」は見えないけれど
「思いやり」はだれにでも見える
その気持ちをカタチに

どのような時代を迎えようとも、「思いをカタチに」できる人に育ってほしいという願いが、校長から卒業生・修了生に伝えられました。それに応じるように答辞では、「誰かに助けてもらったなら、次はその人のために自分ができる事をしよう。思いやりや感謝の気持ちを大切に、周囲の人とより良い信頼関係を築けるように頑張りたい」と決意が述べられました。逞しく成長した卒業生・修了生の姿はとても輝いて見えました。

卒業後、社会との関わりを支える一つのコンテンツとして、高等部普通科3年生は「トリセツ」を作成します。「トリセツ」には、自分のことを周囲に分かりやすく伝えるために、コミュニケーション、聞こえ、配慮してほしいこと、自身の強みなどをまとめます。それだけではありません。自分の今に気づき、自分の苦手さを受け入れ、そして、必要な時に他者に理解とヘルプを求めるといふ社会を生き抜くために必要な知識と技能を身に付けます。卒業式間近、幼稚部保護者に「トリセツ」をプレゼンする機会がありました。わが子のロールモデルである卒業生から、社会を生き抜くための実際の話を見聞きし、将来の姿に見通しをもつことができた保護者から大変高い評価を得ました。乳幼児から高等部までの幼児児童生徒が通う一貫教育の成果として、今後も是非続けたい取組です。

私の取扱い説明書(例)



駒場の探求 —総合学習地域研究—

附属駒場中・高等学校 国語科教諭 杉村千亜希



本校では、総合学習の一環として地域研究を行っています。地域研究とは、特定の地域を対象に、5人程度のグループで研究テーマ

を立てて現地調査を行い、成果発表をするという一連の学習活動です。本校に長く続く学習で、毎年2・中3・高2の学年の生徒が、それぞれ半年以上をかけて取り組んでいます。

令和4年に中学に入学した76期生は、中学1年生の3学期から東京地域研究に取り組み始めました。地理科や他教科の先生・担任団の協力を得ながら、実行委員(校外学習委員)主導のもと準備を進めます。グループごとに研究テーマを立て、取材



訪問取材の様子

計画を作成し、訪問先にアポイントメントを取り、中学2年5月の校外学習当日は訪問取材に出かけます。取材後には訪問先にお礼状を書き、研究の成果を報告書にまとめました。以上の内容を生徒たち主体で行うのですが、学外の大人に訪問取材のお願いをすることも、中学生にとっては大冒険です。緊張した面持ちで電話をする生徒・メール文の一語一語を吟味する生徒・それらの生徒を見守る仲間たちなど、一つ一つの経験が大きな社会勉強になりました。訪問取材の日、生徒たちは「面白かった!」「勉強になった!」「研究所の人すごかった!」と顔を輝かせて学校に帰ってきました。

今年中学3年生になった76期は、5月に行う東北地域研究に向けて準備を進めています。今回は岩手県を中心とした東北地方へ3泊4日の校外学習で訪問取材を実施します。生徒たちが、また学ぶ喜びにあふれた笑顔で取材先から帰ってくるのを楽しみにしています。

取材後の記念写真撮影





教師も国際交流

附属小学校 教諭 志田正訓

令和6年1月31日(水)、韓国の小学校の先生が来日され、本校の授業を参観されました。当日は、国語科・青山由紀教諭、社会科・粕谷昌良教諭、算数科・青山尚司教諭、理科・志田が授業を公開しました。

授業後には協議会を開き、授業について語り合いました。いずれの教科においても、本校がこれまで長年研究してきた教科の本質にせまる学びの核心をつく質問がなされ、時間を忘れて授業談義に花が咲きました。他にも、若手教員の育成に関する質問もありました。

このような機会は、私たちにとって、授業のあり方をベースとして世界の教師とつながる大変貴重なものです。今回の国際交流を通じて、より良い授業を目指す志や、子どもたちへの愛は世界共通なのだ実感しました。



通訳をしてくださった韓国の先生(左)



授業協議会の様子



3年生最後の寄宿舎行事

～笑顔で送る分散会 在校生思い出と共に～

附属視覚特別支援学校 寄宿舎指導員 佐伯 登

卒業式を前にした寄宿舎での分散会は、在校生から卒業生への想いが込められた素晴らしいものでした。生徒主催のもと、今年度のテーマは「輝け！旅立ちの時、羽ばたけ！思い出のその先へ！」でした。会食の際の、卒業生トークショーでは、在校生との思い出や寄宿舎での役立つ情報が披露され、会場は大いに笑いに包まれました。食後には、卒業生と一緒にアキネータークイズを楽しみました。このゲームでは、質問をしながら正解を特定していくのですが、予想外の答えもあり、参加者全員が笑いながら盛り上がりました。また、卒業記念品の贈呈が行われ、在校生手作りのネームプレートが付けられた特別製のタンブラーを渡された卒業生の笑顔が印象的でした。



卒業記念品に勇気を貰える言葉記載



感謝の気持ちを込めて



西オーストラリア研修

附属坂戸高等学校 主幹教諭 中臺昇一

本校は地球市民としての視点の獲得を目的として、海外での校外学習を積極的に実施しています。令和6年3月24日～4月2日の日程で、本校としては初めての西オーストラリア研修を実施しました。拠点となるパースまでは15時間のフライトです。研修は、西オーストラリア大学(UWA)のキャンパスツアーからスタート。ピナクルズでは酸性雨の影響について、シャークベイではストロマトライトの観察や海洋生物の探索、絶滅危惧種ジュゴンとも出会うこともできました。海洋生物学者の方からシャークベイが抱える環境問題などの話を聞かせて頂き、気候変動の影響がここまで来ていることを学びました。10日間の大変充実した研修となりました。



パース市街を望む
キングスパークにて



シヨン発見！(シャークベイ)



シャークベイでの海洋環境実習



Lancaster Catholic High Schoolの教室で

春の国際教育プログラム

附属中学校 教諭 栖原 昂

本校では、春季休業中に希望者を対象に2つの国際教育プログラムを行った。

【アメリカ短期留学プログラム】今年で10回目を迎える本プログラムには、中学2、3年生の36名が参加し、ペンシルベニア州のランカスター郡に令和6年3月20日～3月29日の10日間（移動も含む）滞在した。現地では、全員がホームステイをしながら、平日はLancaster Catholic High Schoolの生徒と一緒に授業を受け、休日はホストファミリーと教会や観光地に出かけるなどして、現地の生活にどっぷりと浸かることができた。生徒たちは異なる文化や宗教に驚きや新鮮さを感じながらも、受け入れてくれた学校やホストファミリーのホスピタリティと、言語を駆使して人とつながる喜びを存分に感じ、これからの学習や学校生活、そして各自の将来に向けて前向きな気持ちで帰国した。

【国際交流プログラム】本プログラムは、令和6年3月25日～3月27日の3日間にわたって行われ、中学1、2年生の43名が参加した。初日はTokyo Global Gatewayを訪れて英語を使用した疑似体験やプレゼンテーションを行い、2、3日目には本校敷地内の同窓会館でアジア・アフリカの6か国からの留学生を迎えて異文化交流を行った。生徒はグループに分かれて留学生の出身国について学んだり、COOL JAPANを伝えるプレゼンテーションを行ったりした。プログラムの最後には文化交流フェスティバルと称して日本の文化や遊びを留学生と一緒に楽しむ時間を設けた。生徒たちは様々な国の留学生たちとの英語漬けの3日間を通して、英語学習やグローバル社会における多文化共生の大切さを学ぶことができた。



同窓会館での国際交流プログラムの様子

アメリカ短期留学に参加した生徒たち



えがおカフェサイン

ガレージカフェ・プロジェクト2024

附属大塚特別支援学校 主幹教諭 大宮弘恵

令和6年1月29日工事開始。約2ヶ月をかけて、校門横の古いガレージがカフェに生まれ変わりました。これは医療機器・防災防犯用具、教材教具の製造販売の老舗である株式会社三和製作所様（東京都江戸川区：代表取締役 小林広樹氏）より改修費等のご寄付をいただき実現しました。

令和2年7月21日11時にチャレンジスタートしたクラウドファンディング『えがおカフェプロジェクト～生徒たちにさまざまな職業体験を！えがおカフェをオープン』から3年8ヶ月。もう少し遡ると、平成28年に高等部作業学習に「製菓班」を立ち上げた時から、生徒たちが、自分一人または仲間と協力して作ることができるお菓子のレシピ開発や保護者を対象としたカフェの運営等、工夫を重ねながら活動に取り組んできました。

活動を通じて、生徒たちが自分から話し合い、協力し合う様子や相手の立場に立ち「どうしてもらおうと気持ちが良いか」を考えて行動する様子が見られるようになっていきました。「相手が何を求めているか」「何をしたら喜んでくれるか」を生徒たち自身が考えるきっかけとなりました。他者の気持ちを理解したり想像したりすることが苦手な子ども達にとってはとても良い機会と考えます。

現在、本校では、高等部生徒を中心に、『みんながえがおになれるカフェ』を合言葉に、完成したガレージカフェ「えがおカフェ」が、在校生や卒業生と一緒に作る新しいキャリア教育の場、インクルーシブ交流の場となる

よう、6月中旬のオープンを目指してトレーニング中です。



製菓作業初回

ガレージカフェ外観



第52回 肢体不自由教育実践研究協議会を オンラインにて開催

附属桐が丘特別支援学校 教諭 田村裕子

令和6年2月2日(金)、3日(土)と、『子供が学ぶ』を追究する-共生社会の担い手を育むために-」をテーマに肢体不自由教育実践研究協議会を開催しました。

本校では「学校教育における『学ぶ』の主語は子ども」という理念のもと、障害の重い子どもの学びを例に、日々の授業で子どもたちはしっかりと学んでいるのか、授業で学んだことが子どもたちの力につながっているのかとい

う視点からの授業作り、授業改善に取り組んできました。協議会では、生活科、国語科、算数・数学科の3つの教科分科会を開き、授業の中で見せる子どもの姿をもとに、「子どもが学べているか」を評価しながら、授業改善を図った実践について報告しました。全国の参加者の方々と協議を通して、私たちも多くの学びを得ることができました。

算数科「形で遊ぼう」

生活科「“やってみよう”を広げよう」

配信の様子



南極派遣のその後 - 附属小学校との連携を通して -

附属高等学校 教諭 小松俊介

私は、第64次南極地域観測隊に教員派遣として参加し、昭和基地と附属高校を接続して「南極授業」を実施しました(令和5年1月)。ここでは、帰国後の取り組みとして本校と附属小学校の事例をご紹介します。

南極授業で取り組んだ青焼写真を高校1年生の総合的な探究の時間で扱いました。1年次は探究の基礎知識を学んだ後、担当教員の講座に別れて予備研究に取り組みます。青焼写真は紫外線に反応する原理で、かつては図面などに用いられた技法です。私の講座では、様々なアプローチから探究活動に取り組みました。その中で、教育普及の観点から青焼写真のワークショップを企画し、実践と考察を行う生徒が現れました。

附属小学校の由井蘭先生にご協力いただき、小学校2年生26名を対象としたワークショップが実現しました(令和5年12月)。4名の高校生が企画・運営をしたワークショッ

プは、天候にも恵まれ充実したものとなりました。小学生は「ここが高校か…」と初めは緊張した面持ちでしたが、それぞれに工夫をしながら楽しく制作に取り組むことができました。子どもたちの鋭い気づきとキラキラした笑顔が印象に残っています。後日、由井蘭先生から子どもたちの学びポケットの内容を共有していただきました。その中に、自分でピンホールカメラを作成し、感光紙を入れて風景を撮影したという報告がありました。これには、私も驚きました。小学生の探究心と行動力に刺激を受けながら、高校生もそれぞれの研究を論文にまとめました。お互いに学び合う形として、今後も附属学校の連携の形を模索していきたいと思います。

高校生による説明



現像の様子



第19回「科学の芽」賞

第19回 朝永振一郎記念

科学の芽賞

募集

ふじきだと思わずに
これが科学の芽です
よく観察してたしかめ
そして考えること
これが科学の茎です
そうして最後になぞがとける
これが科学の花です

応募期間
2024. 8/19日 → 9/17日

応募資格
小学校3年～6年、中学校、義務教育学校、高等学校（筑波大学附属高等学校を除く）、中等教育学校、特別支援学校（小学校3年～卒業生）の個人もしくは団体

応募方法
附属学校教育局WEBサイト（<https://www.tsukuba.ac.jp/attach/03-3942-6800/>）をご確認ください。

募集締め切り
2024年11月下旬、筑波大学WEBサイトに掲載

賞・記念品
「科学の芽」賞の受賞者には学振より賞状と記念品を贈呈
（<https://www.tsukuba.ac.jp/attach/03-3942-6800/>）

賞状・報告書
2024年12月21日（土）筑波大学「科学の芽」賞に輝いた作品展
（筑波大学附属）

主催——筑波大学
協賛——培英通信社、日本教育新聞社、共研出版社、内閣府、文部科学省、日本科学教育学会、日本理科教育学会、日本物理学会、日本物理教育学会、日本化学会、日本生物教育学会、日本地質学会、日本地学教育学会、日本初等理科教育研究会

お問い合わせ先 筑波大学「科学の芽」賞実行委員会 仲谷美穂
TEL 03-3942-6806
E-mail: kagakunome@un.tsukuba.ac.jp
URL 筑波大学WEBサイト（<https://www.tsukuba.ac.jp/>）「研習」欄
<https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

<https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

発行日………令和6(2024)年5月31日
発行者………附属学校教育局教育長 呑海沙織
発行所………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800
デザイン………スピーチ・バルーン
印刷………広研印刷 使用紙: Ulimax [日本製紙]

